

丸底小鉢考

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



写真1 京都市内で出土した丸底小鉢

はじめに この土器の名前は、小振りな土師質の器につけた仮の名称です。使用方法もはっきりとはしていないので正式名ではありません。京都の遺跡からは、土器・陶磁器をはじめ各種の遺物が数多く出土しますが、それぞれに注目するとまだ用途が理解できていないものがたくさんあります。土師器の丸底小鉢もその一つです。この器を紹介し、その用途などを考えてみます。

出土例 丸底小鉢は、四条烏丸界限やJR京都駅付近では、一つの遺構からまとまって出土する例を含め、室町時代頃のものもいくつかも発見されています。京都御苑西側の内膳町などの調査では、数箇所で桃山時代から江戸時代の初

め頃のもの、かたまって出土しています(写真1)。また、奈良市内では中世の奈良町で類似品の出土例がありますが、これ以外には他の地域での出土例を知りません。今のところ、京都や奈良の都市遺跡では、室町時代から江戸時代の初め頃のほぼ限られた時代しか出土しない、やや特異な土師器です。

丸底小鉢を観察する 器の形は口の開いた先の丸い砲弾形で、大きさは口径が11cmほどで高さが10cmより少し低い程度のもので、時代が下がるにしたがって器壁は厚くなりますが、形やサイズは大きくは変化しません。作り方は、仕上げが徐々に雑になるものの、各時代を通して手づくねで成

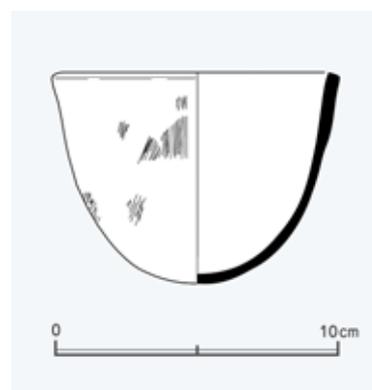


図1 丸底小鉢の実測図

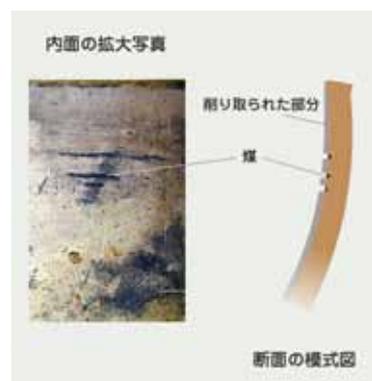


写真2 丸底小鉢の内面

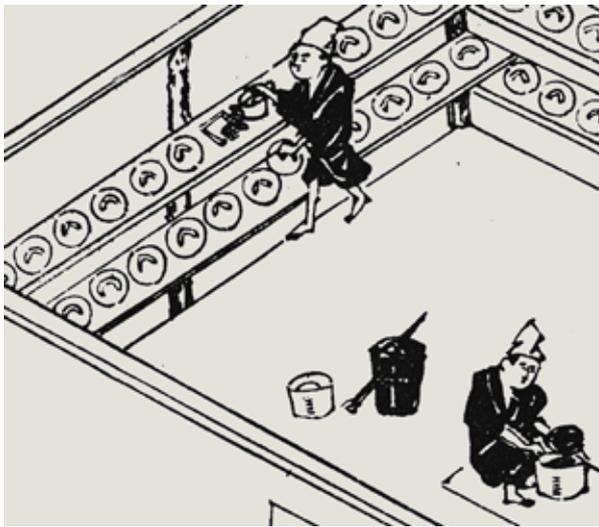


図2 油煙取りのようす 『古梅園墨談』より部分転載



写真3 現在の採煙のようす

形しています（図1）。

もうひとつ明らかな共通点は、その大半は内面が平滑（つるつる）になっていることです。

土器作りには、へらや小石などで器表を磨く技法もありますが、その場合は、磨きに使った道具の痕跡が残ります。丸底小鉢を観察すると、そのような痕跡はほとんど残っていません。しかし、土器を作った時につく刷毛目状の痕跡が、表面を削られたように一部に残っている例があります。そこから、内面が平滑なのは、土器が使用されていた時点でついたものであると推測できます。

また、残った刷毛目の細かい筋のなかに、煤が付着している例があります。土器が完成したあとで火を受けたものや、内側に煤が染み込んで表層が灰黒色に変色したのも少なくありません（写真2）。

用途を考える そこで、用途の推測をしてみます。丸底小鉢は、搦鉢のようにものをすりつぶす容器で、作業の結果として器の内面がすり減ったのであろうとも考えられます。これに似た小型の器に、

薬品などのすりつぶしや調合に使用する乳鉢にゅうぼちがあります。また、古代の須恵器の硯すずりでも、墨をすった部分は平滑に磨滅しています。乳鉢や硯は、搦鉢と同じで、据えて使用することが基本であり、高台がついているか平底になっています。そうすると、器形からみるかぎりでは、搦鉢や硯のように使われた可能性はないでしょう。

逆に、高台のない丸底小鉢は、口縁の部分を下にして用いられたのではないかと思われてきます。丸底なので、立てて使うことはできません。そこで、蓋状に伏せて使用した道具ではないのかと考えつきます。

油煙を取る道具 奈良市に「古梅園こばいえん」という江戸時代創業の墨屋があります。江戸時代に出版された『古梅園墨談』では、墨の製法が詳しく描かれています（図2）。

古梅園で使っている「どうき」と呼ばれる油煙を取る道具は、皿の裏側に取っ手をつけたものです。この道具は、菜種油なたねなどをいれた灯明皿とうみょうざらの上にかぶせ、油煙を内面に付着させて使うものです。

作業場となる煙室で同時に200個くらい並べて使います（写真3）。付着した煤は順々に羽箒はねぼりで掃き取って集め、膠にかわで練って成形します。現在使われている皿は信楽しがらきで焼かれていて、丸底小鉢に比べると少し焼きは堅いのですが、本来は土師質のようです。

どうきの内面を観察すると、丸底小鉢と同じように平滑になっています。繰り返しの作業と、小さくて非常に硬い炭素粒子のなせる業でしょう。どうきは、奈良県や大阪府、京都市伏見区などにある江戸時代の遺跡からはいくつも出土していますが、中世の遺跡では今のところ発見されていません。

まとめ 丸底小鉢は、どうきとは形が全く違うため、内面の使用痕跡が共通するというだけで、中世以前の油煙取りの道具であると断定はできません。しかし、文献資料では断片的にしかわからない中世以前の墨作りの歴史を、考古学的に解明していく上で重要な資料になる可能性を十分に秘めているものでしょう。

（小森 俊寛）